

日本英文学会北海道支部 第 60 回大会プログラム

日時：平成 27 年 11 月 1 日（日）

会場：北海道大学 人文社会科学総合教育研究棟（W 棟）

（札幌市北区北 10 条西 7 丁目）

<会場アクセス・地図>

- ・ JR「札幌駅」(西改札口・北口) から徒歩 12 分
- ・ 地下鉄南北線「北 12 条駅」から徒歩 10 分



<懇親会のご案内>

日時：11月1日(日) 18:00~20:00

場所：ファカルティハウス エンレイソウ (北11条西8丁目)

会費：一般4,500円、学生2,500円

* 懇親会参加希望の方は、10月22日(木)までに下記までお申し込みください。

事務局 担当：斎藤彩世 Eメール：hokkaido@elsj.org
(件名を「支部大会懇親会参加申込」として下さい)

* 発表者・参加者控室 W307 教室 (茶菓の用意があります)

日本英文学会北海道支部第60回大会プログラム

日時：平成27年11月1日（日）

会場：北海道大学 人文社会科学総合教育研究棟（W棟）

（札幌市北区北10条西7丁目）

受付開始（10:00～）（W棟 3階 308教室前）

理事会（9:30～）（W棟 3階 308教室）

開会式（10:30～）（W棟 3階 309教室）

開会の辞 日本英文学会北海道支部支部長 瀬名波 栄 潤

〈文学部門〉

研究発表（10:40～12:25）

第1室（W棟 3階 309教室）

1.（10:40～）

Allison Pearson, *I Don't Know How She Does It*
‘Having It All’をめぐる

司会 北星学園大学 斎藤 彩世

藤女子大学 英 美由紀

2.（11:15～）

Scribbling in the margin of *Jane Eyre*
21世紀のオンライン読者共同体と『ジェーン・エア』の余白への書き込み

司会 北星学園大学 島田 桂子

北海道薬科大学 板倉 宏予

3.（11:50～）

「ずらし」と「解体」
Emily Dickinsonにおける死の空間詩学

司会 北海道教育大学釧路校 上石 実加子

北海道大学大学院 石川 まりあ

第2室（W棟 3階 308教室）

1.（10:40～）

Sherwood Andersonとフロンティア

司会 札幌学院大学 岡崎 清

北海道大学大学院 一瀬 真平

2.（11:15～）

映写される分身
Truman Capoteの“Miriam”における映画の表象

司会 札幌市立大学 松井 美穂

北海道大学大学院 宮澤 優樹

3.（11:50～）

「卵とわれら」
Vladimir Nabokovの*Pnin*における死と誕生

司会 北海学園大学 本城 誠二

北海道大学大学院 若木 美桜

シンポジウム (13:30~16:00) (W棟 3階 309教室)

-日本アメリカ文学会北海道支部共催-

Dean Who?

幻の文豪William Dean Howellsの実態に迫る

司会・講師	東京工業大学	上 西 哲 雄
講師	金沢大学	久 保 拓 也
講師	工学院大学非常勤講師	吉 田 明 代
講師	京都大学	水 野 尚 之

特別講演 (16:15~17:25) (W棟 3階 309教室)

イギリス世紀末文学とリアリズム

司会	札幌医科大学	森 岡 伸
	武庫川女子大学	玉 井 暉

〈語学部門〉 (W棟 4階 408教室)

研究発表 (10:40~11:15)

削除現象における焦点効果と項選択

司会	北海道大学	大 野 公 裕
	北海道大学	奥 聡

招聘発表 (11:20~11:55)

水平表現としての上下のメタファーについて

司会	札幌学院大学	眞 田 敬 介
	札幌学院大学	山 添 秀 剛

セミナー (13:30~14:50)

英語歴史統語論から言語の変化と不変化を探ってみる

司会	北海道教育大学札幌校	茨 木 正志郎
	中部大学	柳 朋 宏

シンポジウム (15:15~17:15)

日本英文学会北海道支部・語学部門の60年
福村虎治郎を読み直す

司会	北海道大学	野 村 益 寛
講師	札幌大学	對 馬 康 博
講師	北海道教育大学名誉教授	水 野 政 勝

閉会式 (17:30~) (W棟 3階 309教室)

閉会の辞 日本英文学会北海道支部副支部長 本 堂 知 彦

懇親会 (18:00~20:00)

場所：ファカルティハウス エンレイソウ (北 11 条西 8 丁目)

<発表要旨>

<文学部門：研究発表>

Allison Pearson, *I Don't Know How She Does It*
'Having It All'をめぐる

英 美由紀 (藤女子大学)

2011年(日本では翌年)公開された映画『ケイト・レディが完璧な理由』は、大手投資会社に勤めるワーキング・マザーの奮闘記。Allison Pearsonによる原作 *I Don't Know How She Does It* (2002) は、チク・リットのサブジャンル'mommy lit'の「ウル・テキスト」とされる。

キャリアと私生活の両立の困難から会社を辞し、子供と移り住んだ田舎で倒産したドールハウス工場の立て直しに乗り出そうとする主人公の姿は、第二波フェミニズムが目指した'having it all'の限界に対し、オルタナティブな女性の人生の可能性を提起する一方、私的領域への撤退、個人的な解決とも言えるその選択は、楽観的に捉えることもできない。

こうした「曖昧さ」については、すでに複数の先行研究に指摘されているが、本発表はこのテキストをポストフェミニズムの文脈やその背景をなす社会経済状況に位置づけ、また結末についてはポストフェミニズムの多義性や、ジャンルに特徴的な語りにも言及しながら考察する。

Scribbling in the margin of *Jane Eyre*

21世紀のオンライン読者共同体と『ジェーン・エア』の余白への書き込み

板倉 宏予 (北海道薬科大学)

インターネットの普及により、読者がネット上にコミュニティを形成することが容易になった。オンラインの読者共同体の存在により、新たに力を獲得したもののひとつが読者による二次創作である。ファン文化研究のパイオニアである Henry Jenkins が“scribbling in the margin (原作の余白に書き込む行為)”と呼んだ二次創作は、読者による原作の解釈の発表の場であり、また、読者による原作介入、改竄の場でもある二次創作である。作品の二次創作を分析し、その傾向を見れば、読者にとって、その作品のどの部分に余白があり、また、その余白に書き込まずにはいられない魅力があるかを推察できる。

本発表は、古典作品の中では二次創作が多い *Jane Eyre* の二次創作を原作の解釈・改竄として分析することにより、現代の読者にとっての *Jane Eyre* の意味と意義の追求を試みるものである。

「ずらし」と「解体」

Emily Dickinson における死の空間詩学

石川 まりあ (北海道大学大学院)

南北戦争のさなかに創作の最盛期を迎え、個人的にも多くの死を経験した Emily Dickinson は、死をめぐる語りを執拗に試みていた。Dickinson にとって、死は直接的には言語化不可能な“Mystery”であり、それに迫るためには特別な語り方をせざるを得なかった。その方法のひとつが、“Space”、“Abyss”あるいは“Room”などの空間表象である。これらの空間のイメージは、喪失の比喻としての役割を果たすのみならず、いかに死を表現しうるのかという難問に対する詩人の挑戦を実演してみせる。空間は、語るべき対象である「死者」を置き換え、最終的に消失させる場として機能することで、死を名づけ意味づけようとする言語化のプロセスをも解体し、「語れないこと」という定義にもとづいた死／存在論的世界の向こう側を描きだすのである。追悼詩をはじめとする作品群を中心に、空間表象が死の主題を扱う Dickinson の特殊な身ぶりや連動していることを論じたい。

Sherwood Anderson とフロンティア

一瀬 真平 (北海道大学大学院)

Sherwood Anderson の作品の多くは、産業化の波が押し寄せようとする 19 世紀末のアメリカ中西部の田舎町が舞台であり、失われていく田園的な世界が郷愁とともに描かれていることで知られている。だが、Anderson は、このような過去の町をノスタルジックに振り返るだけでなく、その町の原初を罪深く見つめる視点を持っていた。つまり、Anderson の作品には、西漸運動に伴うネイティブ・アメリカンの迫害の罪という主題が伏流しているのである。Anderson は Ohio 州の町を頻繁に作品の舞台とするが、その Ohio の始まりにも、白人が北西部領地を巡って先住民と対立し、彼らから土地を奪った歴史がある。そのようなフロンティアが抱える罪が、1920 年前後に書かれた“Godliness”(1919) や“Out of Nowhere into Nothing”(1921)、“The Egg”(1920)といった短編の中で暗示的に言及されている。本発表では、西漸運動の罪という観点から Anderson 作品を考察することで、土着の作家 Anderson の新たな作家像を浮かび上がらせたい。

映写される分身

Truman Capote の“Miriam”における映画の表象

宮澤 優樹 (北海道大学大学院)

Truman Capote への見方のなかでも、彼が「映画とかかわりのある作家だった」という視点と、「分身をはじめとする南部的な主題を扱った作家だった」という視点が、とりわけ目を引く。なぜなら、これらふたつの視点は、作品のなかで有機的に結びつくものだからである。最初期の短篇“Miriam”(1945)には、そのことが如実に表れている。この作品は、早くから指摘されているように、主人公が己の分身と出会うことを主題としたものだった。そうした分身が映画の比喩をとおして語られていることを、本発表はこの作品への理解に付け加えたい。作中で映画が言及されるのは、分身たる少女 Miriam が、はじめて主人公のもとに現れる場面だけではなかった。彼女が立ち振る舞う背景が、映画と、それを映写する光の表象によってかたどられているのである。作品を映画という主題から吟味することによって、「映画作家」カポーティの新たな見方を示したい。

「卵とわれら」

Vladimir Nabokov の *Pnin* における死と誕生

若木 美桜 (北海道大学大学院)

本発表は、Vladimir Nabokov の長篇小説 *Pnin* において、一見すると滑稽で道化的な主人公 Pnin の人物造形に、ある種聖性のようなものが意図的に付加されていること、そしてそれに作中で頻出する死と誕生のテーマが密接に繋がっていることを説明しながら、Nabokov が *Pnin* という人物を生み出した意図に迫るものである。

本発表では、従来の *Pnin* 批評ではあまり注目されてこなかった「復活」「誕生」というテーマを扱い、また、作中で繰り返し言及されるモチーフでありながら、それ自体に注目して取り扱う批評のなかった「卵」のモチーフとの繋がりに注意を払い、作者自身が編集者への手紙で“*What I am offering you is a character entirely new to literature . . . and new characters in literature are not born every day.*” (*Selected Letters* 178)とまで言い切った、その *Pnin* の登場人物としての新しさについて再考したい。

<文学部門：シンポジウム>

Dean Who?

幻の文豪William Dean Howellsの実態に迫る

司会・講師	上西 哲雄（東京工業大学）
講師	久保 拓也（金沢大学）
講師	吉田 明代（工学院大学非常勤講師）
講師	水野 尚之（京都大学）

アメリカ文学を学ぶものなら誰でも知っているが、その作品を読んだことのある者、ましてや研究の対象としたことのある者が殆どいない作家 William Dean Howells (1837-1920)。この幻の文豪について検討することがこのシンポジウムの主旨である。文学史ではHenry JamesやMark Twainを見出した19世紀後半を代表する文芸ジャーナリストとされ、その作品も代表作のいくつかが必ず紹介されて、ジェイムズやトウェインと共にリアリズムの三本柱を構成するかのよう扱われる。してその実態やいかに。本シンポジウムでは、ハウエルズが小説家として最も油の乗ったとされる1880年代を中心とする代表作3作を検討すると共に、そのリアリズムの内実を明らかにする。文学史の通り一遍の解説から一歩踏み込んだ議論を提示することで、「読んでみたくなるハウエルズ・シンポ」を目指す。

*A Modern Instance*を読む

なぜ離婚訴訟で勝負をかけたのか

上西 哲雄

ハウエルズが小説家としての地位を確立したのは、文芸ジャーナリストとしての成功の絶頂とも言ふべき*Atlantic*誌の編集長を辞して世に問うた*A Modern Instance* (1882) によるとされている。物語はNew Englandの小さな村で知り合い結婚したカップルの破綻にいたる経緯を波乱万丈のプロットで描いたもの。当初は強い絆で結ばれて駆け落ち同然でBostonに出てきたものの、次々とトラブルが襲いかかる中で喧嘩が絶えず、遂には夫が夫婦喧嘩をきっかけに家を出た後、偶然が重なったこともあって、そのまま妻を遺棄してしまい離婚訴訟に至る。当時として珍しかった離婚訴訟の記事を見、ギリシャ悲劇の「王女メディア」を観劇して構想したとされているが、それにしても作家として勝負をかける作品が、なぜ離婚訴訟の物語なのか。この疑問からハウエルズ文学におけるリアリズムについて考えたい。

*The Rise of Silas Lapham*を読む

本当に「傑作」といえるのか

久保 拓也

ハウエルズといえばやはり*The Rise of Silas Lapham* (1885)が「傑作」として知られる。確かにどの米文学史の概説書を紐解いても、この作品が軽んじられることはない。だが「金メッキ時代」を背景に、持ち慣れない富に翻弄される成金の「道徳的向上 (rise)」を巡るこの物語が読まれることは少ない。「読者」の期待を裏切るような仕掛けは乏しく思えるが、彼らを額かせる説得力のある考察がふんだんに見られるこの物語は、語り方が重厚であるとも言えるが、ところどころ軽やかで滑稽な表現を試みもする。他にない問題意識を持つ物語と言えるが、紋切り型の判断で済ませているような場面も見られる。我々はこのリアリズム文学の「傑作」をどのように読み始めればいいのか。これを問いかけることからこの作品の魅力に迫り、シンポジウム全体が終わった帰り道、ハウエルズとは何なのだろうかと首をひねって頂けることを目指す。

*A Hazard of New Fortunes*を読む
ハウエルズ式リアリズム小説の味わい

吉田 明代

ハウエルズが1889年に*Harper's Weekly*誌で連載を開始した*A Hazard of New Fortunes*（1890年出版）は、当時大量の移民や労働者を集め国内最大規模の都市となっていたニューヨークを舞台に、さまざまな土地からやってきて新しい文芸誌の創刊に関わる人々を登場させた小説であり、おそらくハウエルズが自身のリアリズム論を最も忠実に実践した作品のひとつである。ニューヨークという都市の描写、そこに住む人々の多様な習俗（manners）、新天地での成功に伴う道徳的危険という主題、そして労働争議のエピソードに示される社会問題に対する意識など、この作品を読み解くポイントはいくつもあるが、「リアリズム小説」という枠組みの中でそれらの要素がどのように扱われているかを検討しながら、ハウエルズ文学の特質と持ち味を明らかにしていきたい。

ハウエルズの批評とジェームズの批評

水野 尚之

リアリズムは、アメリカ文学の中でも誤解されやすい文学用語の一つである。同時代に生きたヘンリー・ジェームズとハウエルズについても、リアリズムについてのそれぞれの主張を見る時、両者の資質や時代の捉え方の差異は明らかである。ジェームズは、リアリストでありつつ、小説の芸術的統一のためにロマンス的要素を排除しなかった。リアリズムとロマンスの危うい均衡の上に成り立つジェームズの小説「美学」が文学愛好家に与えた影響は大きく、ハウエルズをはじめとする他のリアリスト作家たちの評価を曇らせたことは否めない。しかし一方で、ジェームズのリアリズムは、当時のアメリカやヨーロッパの社会から次第に遊離し、心理描写へと向かった。ハウエルズの目指すリアリズムとの決定的な違いである。ジェームズとハウエルズが半世紀にわたって書いた文書から、両者のリアリズム観を検証する。

<文学部門：特別講演>

イギリス世紀末文学とリアリズム

玉井 暉（武庫川女子大学）

イギリス世紀末文学はヴィクトリア朝の伝統的な小説において展開したリアリズムをどのように継承し、あるいはまた、どのような反発を示してリアリズムの問題性を克服しようとしたのか。Fantasy novel、fairy tale、psychological romance、adventure novel、detective novel、SF 風物語、等が世紀末に出現した有力なジャンルの文学とすれば、これらの文学現象とリアリズムとのあいだにどのような関係が想定できるのか。オスカー・ワイルドを中心に、イギリス世紀末文学のリアリズムに対する反発のありようを検証し、その意味を考えてみたい。

<語学部門：研究発表>

削除現象における焦点効果と項選択

奥 聡（北海道大学）

日本語には項削除として分析されるべき空項がある((1)の[e]はゆるい同一読み(花子の論文)を許す)

が、英語(2)では項削除は不可能である(Oku 1998, Takahashi 2008, etc)。

(1) 太郎は自分の論文が採用されると思っている。花子も[e]採用されると思っている

(2) Taro_i thinks his_i proposal will be accepted. Hanako also thinks it (*[e]) will be accepted.

Saito (2007)はこの日英の違いを項・動詞一致現象の有無から説明できると提案した。本発表ではこの提案から導かれる課題(A)(B)を検証し、日本語の honorific agreement は項削除を妨げないこと、また必須要素として選択されている項や副詞類と純粋な随意要素とで、削除による「非焦点効果」の影響の違いが見られることを論じる。

(A) 日本語でも「一致現象」がある場合は項削除が妨げられるのではないか

(B) 動詞との一致現象を起こさない副詞類は削除が可能なのではないか

< 語学部門：招聘発表 >

水平表現としての上下のメタファーについて

山添 秀剛 (札幌学院大学)

本発表では、*an up/down train* (上り／下り列車) や *high/low latitudes* (高／低緯度) のような、水平を垂直で理解する「上下のメタファー」を考察する。まず、一般的な「上下のメタファー」の実例から我々には垂直軸が重要であることを概観し、これらの実例と水平を垂直で捉えるメタファーを比較する。次に、先行研究として Lindner (1981)と瀬戸 (1995) を取り上げ、その意義と問題点を指摘する。そしてその解決法を、他の実例も併せて考察しながら、検討する。結論として、典型的な「上下のメタファー」は抽象領域を空間領域で理解するのに対して、水平を垂直で理解するこの奇妙なメタファーは起点領域も目標領域もともに空間領域であり、特殊なメタファーであることを示す。また、一般的な「上下のメタファー」だけでなくこの特異な「上下のメタファー」にも、価値に拘束されない事例も存在することを明らかにする。

< 語学部門：セミナー >

英語歴史統語論から言語の変化と不変化を探ってみる

柳 朋宏 (中部大学)

生成文法に基づいた英語史研究では言語変化の要因とそのメカニズムを探ることを目的としている。しかしながら言語変化を研究する際には、言語変化だけでなく、言語の「不変化」にも目を向ける必要がある。

言語は変化するものである。変化のきっかけは偶発的なものであるかもしれないが、その変化が許容されれば、ある言語で新しい文法として定着することになる。一方、そのような変化が許容できないものであれば、一時的な誤りとして既存の文法からは破棄されることになる。つまり新しい世代へと文法が受け継がれる際、言語の「変化」と「不変化」という選択肢が存在する。本セミナーでは、このような変化と不変化の例として内在格の消失と前置詞の利用可能性を取り上げる。英語はその歴史において、内在格の消失後、前置詞の導入を受け入れたが、何故ある環境では前置詞が定着し、別の環境では定着しなかったのかについて考察したい。

<語学部門：シンポジウム>

日本英文学会北海道支部・語学部門の60年
福村虎治郎を読み直す

司会	野村 益寛 (北海道大学)
講師	對馬 康博 (札幌大学)
講師	水野 政勝 (北海道教育大学名誉教授)

今年、日本英文学会北海道支部大会は60回目を迎える。そこで、本シンポジウムでは、第2代支部長を務め、創成期の支部学会の語学部門を担った福村虎治郎 (1914-2002)の業績と学風を振り返ることによって、支部学会の伝統・歴史を確認したいと思う。

本シンポジウムでは、まず司会が支部学会の語学部門の歴史を簡単に振り返った後、對馬講師に主に認知言語学の立場から「意味」をめぐって福村のテキストの読み直しを提示していただく。次に、福村に実際に教えを受けた世代に属す水野講師により福村の学風を紹介していただき、それがどのように現代の英語学研究に継承されるかを具体的な研究を通して示していただく予定である。さらには、フロアから福村に教えを受けた方々、支部学会創成期を知る方々の往時の思い出話など聞かせていただければ幸いである。

本シンポジウムをきっかけに、会員各自が支部学会60年の伝統につらなり、それを今後継承していく立場にあることを感じ取ってもらえればと考える。

(文責・司会：野村益寛)

福村虎治郎の言語観の回顧

對馬 康博

福村虎治郎が生誕してから約 100 年を迎えた今、先生の考えておられた言語観を現代言語学の視点から再読すると、どのような解釈が得られるのだろうか？本発表では、福村の主著 3 部作(『英語学論集』(篠崎書林)・『英語と英語学』(大修館書店)・『英語態(Voice)の研究』(北星堂書店))を通じて、福村の言語観を回顧し、現代言語学の視点から読み直すことを主たる目的とする。具体的には、この 3 部作の中では、特に、伝統文法、構造主義言語学、変形生成文法が触れられているが、本発表では、出来る限り「意味」に関する記述に注目し、現代言語学理論のひとつである認知言語学の言語観との比較を通じて、福村の言語精神を紐解いていく。

初期近代英語を通して見た福村虎治郎の‘形態と意味’
シェークスピアの劇作品の副詞の先行詞をもつ不定詞関係詞節を中心に

水野 政勝

上記先行詞は、(I) 先行詞 (NP) ...前置詞+関係代名詞+To-不定詞 (例、*in which to...*) に見られる。一方、(I) に相当する表現、(II) NP...To-不定詞...前置詞 (例、*to...in*)、(III) NP...To-不定詞...ゼロ前置詞がある (Quirk 1985: 1254ff, Geisler 1995: 44)。16 世紀には (IV) NP...*where*+前置詞 (例、*wherein*) +To-不定詞が特に普通であった (cf. Traugott 1972: 155)。4 つの型の分布を、(i)統語的 (主節中の先行詞の機能、不定詞の補部構造、意味上の主語のとり方)、(ii)意味的 (先行詞の意味による場所、時、様態、道具への 4 つの区分)、(iii)文体的 (散文か韻文の区別) な観点から記述する。‘意味’を大切にされていた福村先生の研究業績を踏まえながら、意味のあり方の一端を、特に形態の存在と意味の面から紹介したいと思う。